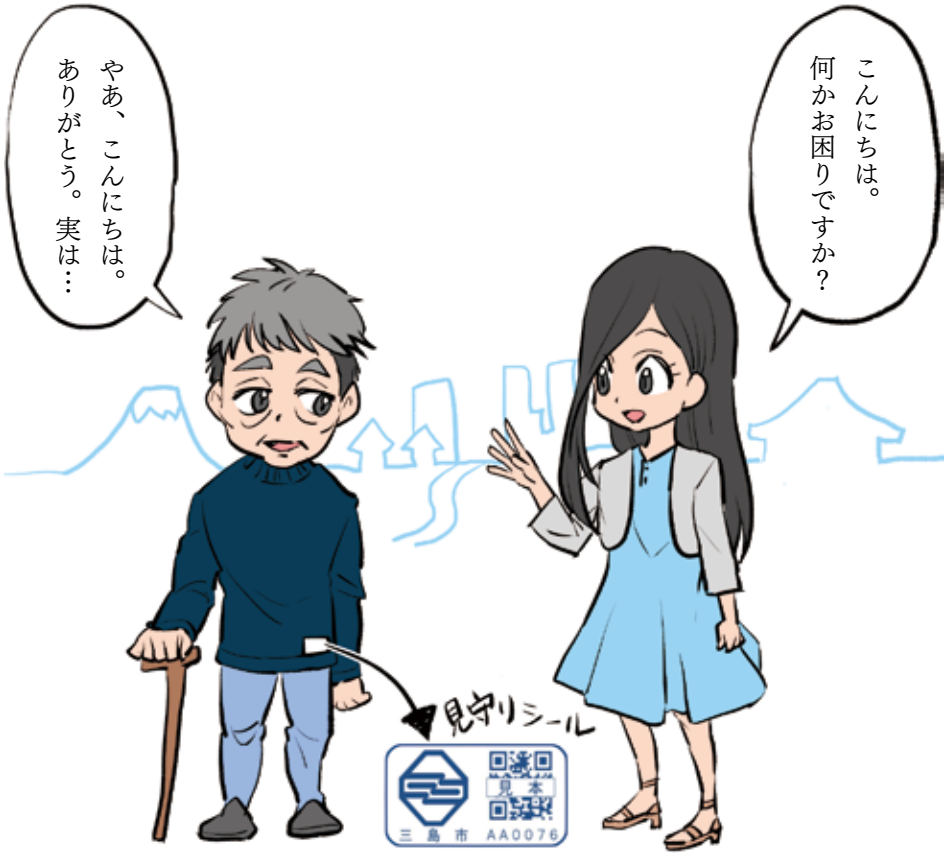
認知症になっても安心して暮らすために

～広がっています、見守りの輪～

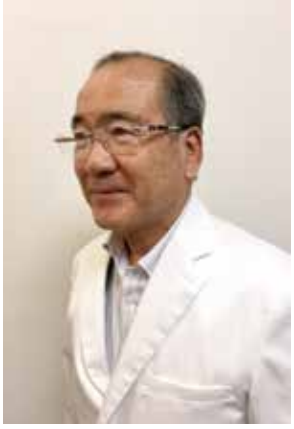
問地域包括ケア推進課☎983・2689



認知症は誰にでもなる可能性のある身近な病気です。2025年には、高齢者の5人に1人が認知症になる時代が来るとも言われています。多くの人は認知症になることに不安を感じ、何も分からなくなってしまうのではと考えています。しかし、すぐに何もかも分からなくなるわけではありません。

発症しても、住み慣れた地域で自分らしい生活を送るためには、周囲の人が正しい知識を持ち、ほんの小さなことでも手を差し伸べることが大切です。市でも、認知症の人やその家族を支えるための取り組みを進めています。

認知症コラム



認知症初期集中支援チーム
認知症サポート医
広小路クリニック理事長　木野紀さん

女優・朝丘雪路さんの訃報が届きました。朝丘さんは、4年前からアルツハイマー型認知症を患い、夫の津川雅彦さんが献身的に介護をしていたそうです。

日本は、男女ともに世界2位の長寿国となり、誰が認知症になっても驚かなくなりました。認知症の診断に必ず使われる「長谷川式認知症スケール」を開発した長谷川和夫さん（89歳）も、自らを認知症であると公表しました。

三島市では、認知症の可能性が疑われる場合に、相談できる窓口を用意しています。早期診断、早期介入、「医療と介護の連携」で、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを進めています。

見守りシールとは

昨年、三島市では、認知症などで行方不明になる可能性のある人に対して、QRコード付きの「見守りシール」配布を始めました。登録すると、情報が市、警察、担当地域の地域包括支援センターで共有され、行方不明となったときに早期発見・早期対応ができるようになります。

QRコードからアクセスする情報共有システム「どこシル伝言板」は、24時間365日、行方不明者を発見した人と家族をつなぐ連絡手段となります。

読み取り訓練

8月26日(日)に芙蓉台自治会の防災訓練の中で認知症高齢者見守り登録事業の読み取り訓練を行いました。「見守りシール」を読み取ることで、既往歴や注意事項などを確認することが出来るため、災害時の対応にも役立てることが出来ます。

「見守りシール」を知っている、読み取ることができる人が増えることで、認知症高齢者を見守りやすい環境づくりに繋がります。読み取り訓練は各地域で開催することも可能ですので、ぜひお問い合わせください。

蓄光見守りシール配布

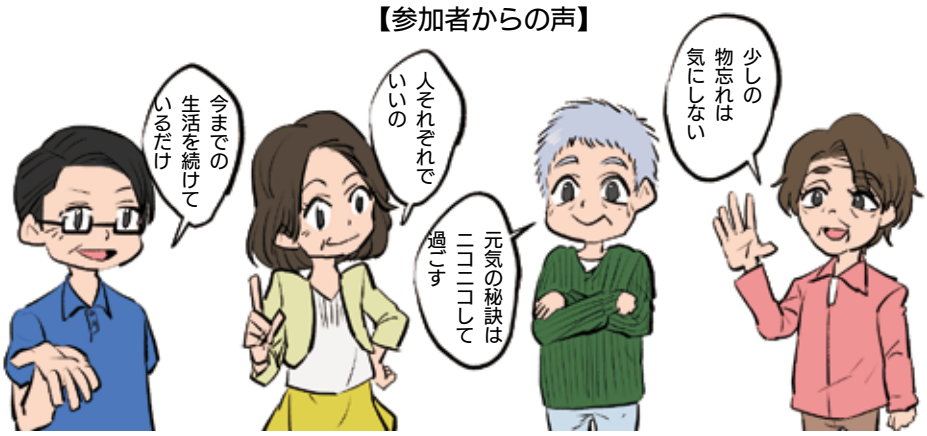
平成30年12月から、圧着式のものに加え、蓄光タイプの「見守りシール」(キーホルダー付き)を配布します。いつも持ち歩いているカバンなどに取り付けることができ、夜間でもシールを確認できるようになります。

既に登録している人には随時発送します。

▲QRコードを読み取ると、「どこシル伝言板」や伝言板入力の流れについて動画で確認できます

本人ミーティング

【参加者からの声】



「おれんじほっとサロン」(街中ほっとサロン(中央町)で月3回開催)で、認知症の本人が主役として自らの声を発信する「本人ミーティング」を実施しました。今後も認知症の人の声を聴き、安心して暮らせるまちづくりを進めていきます。

認知症地域支援推進員

認知症地域支援推進員は、認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らしていくことができるように、容態に応じた必要な医療・介護が受けられる仕組みづくり、認知症の人が身近に通うことができる認知症カフェの運営、認知症の人や家族などへの相談支援を行っています。ぜひお気軽にご相談ください。

旧市内地区　地域包括ケア推進課(地域包括支援センター三島)
☎983・2689

北上地区
北上地区地域包括支援センター
☎989・6500

錦田地区
錦田地区地域包括支援センター
☎975・2424

中郷地区
中郷地区地域包括支援センター
☎984・3777